

人間科学の概念史のために

田 畑 稔

以下は、人間科学の概念史の整理のための作業である。現在、日本でも学部学科名称に人間科学を冠するものは優に100を超えるようであるが、自分たちが掲げる名称について、十全な学問的議論がなされているとは言えないのが現状であろう。人間科学という用語は、事実、18世紀以来、まったく多様な意味で用いられ続けてきているのであるが、しかしそれなりの概念史を持っているのであって、こういう概念史を踏まえながら、その限界を厳しく反省しつつ、新たな可能性を研究者それぞれが展開するという姿勢を堅持しない場合には、まったくナイーブな思いつきだけの命名に終わるのではなかろうか。それでは学生やスタッフの中にある、ある種の戸惑いは払拭されないであろうし、まして市民社会の内部で積極的イメージを定着させることは困難である。

また、学部学科名称は所詮、内部的には政治的妥協の産物であり、対外的には市場対策、文部省対策にすぎないという「リアリズム」的了解も見受けられる。たとえばこういう「リアリズム」が、設立の実質的動機のいくばくかを説明できても、そういう姿勢からは知的エネルギーはまったく出てこないという現実も見ておくべきではなかろうか。人間科学の概念史を批判的に整理し、諸科学、諸学の21世紀的再編過程に即しつつ、その新たな可能性を各人が多様な形で積極的に提示するという姿勢が欠けるならば、学問のもつエネルギーが発揮されないまま「ジリ貧」に終わるという「リアリズム」も待ち受けているのではなかろうか。こういった背景的問題意識をもって、若干の事実整理を試みてみた。

I 人間科学の欧語諸表現および隣接する諸概念

人間科学は、現在の日本では、英語の the human sciences (人間諸科学) の訳語として用いられるのが普通である。しかし後で見るとおり、18世紀イギリスの哲学者 D・ヒュームは the science of Man (人間の科学、むしろ人間の学と訳すべきだろう) の構想を語り (ヒューム『人性論』原1739)、19世紀前半のフランスの社会改革者サン＝シモンも science de l'homme (人間の科学) の構想を書いている (『人間の科学

に関する覚書・第一部』1813)。フランス語圏では、les sciences humaines（人間諸科学）と表現される場合もあるが、現在でも基本的には les sciences de l'homme（人間の諸科学）という表現で、心理諸科学や社会諸科学をカバーする伝統的な学問区分をあらわすようである。これらはすべて人間科学と日本語訳されるのが普通であるが、やはり厳密には区別しておくべきだろう。

the human sciences の隣接概念としては、何といても anthropology があげられる。これは人間学とか人類学と訳されているが、anthropos（ギリシャ語、人間）に関する学であり、英語の語源辞典では語義を the science of man と書いてあるのが普通である。事実、anthropology を the science of man と併用している場合も見られ（例えばマリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』1922）、またオックスフォード大学では後述の通り、人類学科が中心になって course of human sciences（人間科学コース）が設けられている。

しかし anthropology の用例は the science of man よりはるかに古い。茅野良男によれば、カスマンの『アントロポロギアの心理学』は1594年に出ており、アントロポロギア（人間学）はプシュコロギア（心理学）とソマトトミア（身体学）の二つの部分からなっていたようだ（『哲学的人間学』塙書房、1969）。イギリス人類学派の創始者であるE・B・タイラーの『Anthropology（人類学）』（1881）は古代人と現代人の比較、言語、人種、生活技術、科学、霊界、歴史、神話などを扱ったもので、まさに総合人類研究であった。その後、機能主義的民族学の流れに立つマリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンらにより the social anthropology（社会人類学）が名乗られた（マリノフスキー、ロンドン大学初代社会人類学主任教授、1927）。現在の合衆国などでは人間についての総合的研究である anthropology（人類学）は、人類の生物学的側面を研究する学問としての the physical anthropology（自然人類学）と文化的側面を研究する the cultural anthropology（文化人類学）、それに考古学からなり、大学によれば言語学も含めるところもあるようである（寺田和夫ほか『人類学』東海大学出版会、1985）。anthropology は哲学領域でも重要な位置をしめており、すでにカントにも『実用的見地における Anthropologie（人間学）』（1798）という書物があるが、現代の die philosophische Anthropologie（哲学的人間学）はマックス・シェーラー（『宇宙における人間の位置』1928）に始まると言えよう。the economic anthropology（経済人類学）の成立はさらに遅れると思われる（カール・ポランニー『ダホメと奴隷貿易』1966）。

the human sciences のもうひとつの隣接概念として humanitas（ラ）、humanities（英）（人文諸学）がある。これはキケロなどにより自由人にふさわしい教養の意味

で用いられたが、ルネッサンス期には、文法や修辞学、歴史学、詩学、道徳哲学など humanista（人文主義者）が教授する学問を指し、古代ギリシャ、ローマの文献の講読と注解が中心であった。もちろん古代文献とは、単に古いという意味でなく、当時の単一支配宗教であるキリスト教から見て、異教的、非キリスト教的、非神学的文献を意味するのである。

解釈学哲学の創始者ヴィルヘルム・ディルタイの『Die Geisteswissenschaften（精神諸科学）序説』（1883）は『The Human Sciences 序説』と英訳されており、その意味ではドイツ語の Geisteswissenschaften や Kulturwissenschaften（文化諸科学、新カント派の H・リッケルトなどの用語）も隣接概念だと言えるだろう。ただし現在のドイツでは die Humanwissenschaft（人間科学）という名称の学部をもつ大学も少数ながら存在しており（ポツダム大学）、また die Wissenschaften vom Menschen（人間の諸科学）という表現も用いられている。いずれも英仏語の直訳であろう。

人間工学（ergonomics または human factors engineering）も隣接概念と言えるだろう。ヨーロッパで用いられはじめた ergonomics は、ergon（work）と nomos（law）という二つのギリシャ語を源としており、労働生理学との関連が強く、作業の法則の学問という意味である。合衆国では human factors engineering, human engineering と表現されてきたが、最近では単に human factors という呼び名に統一されつつあるらしい。人間工学も多義的に用いられていて、人間とその作業環境との関係を、人間の形態、生理、及び心理面から研究する科学、人間が取り扱う機械器具・道具あるいは環境などを、人間にとって使いやすいものになるように設計したり改良したりする科学、人間の身体的・精神的能力とその限界など人間の特性に仕事、システム、製品、環境を調和させるために人間諸科学にもとづいた知識を統合してその応用をはかる科学、などと定式化されているらしい（http://www.people.or.jp/~yoshitake/index_nf.html による）。人間工学は科学知を技術知へと展開する、一種の応用人間科学という側面をもっていると言えるだろう。

scientia（ラ）、science（英、仏）、Wissenschaft（独）という言葉自身も、体系知としての「学」から、専門分化した「科」学へと意味を大きく変容させているのであるが、日常知や技術知や哲学知など、人間は、さまざまな知の対象として人間自身を了解（自己了解）している。だから、人間を対象とする〈知の形式〉という面で人間科学の隣接概念を考えることも、重要な意味をもってくる。とりあえずここではドイツ語で見ておくと、Menschenvorstellung（人間イメージ）、Menschenkenntnis（人間知、Menschenkenner は人間通）、Menschenanschauung または Menschenauffassung（人間観）、Theorien über den Menschen（人間論）などが列挙できるだろうか。これらが

厳密に定義され、区別されて用いられているとは言えないが、人間イメージや人間通は日常知という形式で人間を捉えたもの（たとえば「人は情けの下で住む」など）であり、人間観は人間を見る見方のパースペクティブ的制約や差異（たとえばキリスト教的、仏教的、資本主義的人間観など）を表そうとするものであり、人間論は人間に関する何らかの一般命題や命題群（理論）を含むもの（たとえばホイジンガの『ホモ・ルーデンス（遊ぶヒト）』1939、など）である。

Ⅱ 人間科学のいろいろな構想

人間科学という概念は、まったく多様な意味でこの数百年間、用いられてきたし、現在もそうである。これには困惑を禁じえないものがあるが、自分の「厳密な」定義を前面に掲げて、それに合わないものは一切無視するという態度をとると、逆に人間科学という言葉に伴う複雑な現実をとらえそこなう危険もある。そこでまずは、その代表的な用例をたどっておこう。

（1）ヒューム「人間の学」の構想

人間科学という言葉の初出は、おそらく18世紀だと思われる。ヒュームは主著『人性論』（1739）の序論で「人間の学（the science of Man）」を構想している。ヒュームによれば論理学、モラル、文芸批評（criticism）、政治学などの学はもとより、数学、自然学、自然宗教もまた「人間の学」に依存する。「人間の学」は「これら諸学の首都でありセンターである人間性そのもの（human nature itself）」を対象とする「学」である。具体的には第1篇の知性（understanding）、第2編の情念（passion）を指す。この「学」は経験と観察と実験的方法によって基礎づけられねばならない。「人間の学」を「基礎」として「諸学の完全な体系」が目指されるべきである（舟橋喜恵『ヒュームと人間の科学』勁草書房、1985、参照。ただし舟橋はヒュームの「人間の学」を広く取りすぎていると思われる）。つまり「人間の学」は「人間の本性（自然）そのもの」を対象にし、経験と観察と実験的方法により基礎づけられ、他の諸学に対しては基礎学としての位置を占めるものとして構想されたのである。

（2）サン＝シモン『人間科学に関する覚書』

サン＝シモンは『人間科学に関する覚書・第一部』（1813、森博訳、サン＝シモン著作集第2巻、恒星社厚生閣、1987、所収）で新しい science de l'homme の構想を書いている。「すべての推理を観察され検証された事実に基づかせる傾向」の勝利が、「人間精神進歩史」を特徴づけている。この勝利した「実証科学」「観察科学」の精神

は天文学、物理学、化学を再組織し、現在「生理学」つまり人間身体の研究を基礎づけようとしている。生理学は「人間科学」でもあり、生理学を基礎に心理学も実証科学への道を歩みうる。「個人の認識に関する人間科学」と「人類の認識に関する人間科学」の両面で「人間科学」の実証科学化を進め、それにもとづいて哲学、宗教、政治、道徳、公教育の再組織化を進め、戦争に明け暮れる悲惨な状況を克服しようとするのが、彼の社会改革プランであった。

「人間科学は今日まで推測科学でしかなかった。私がこの覚書で目指した目的は人間科学に観察科学（実証科学）としての性格をはっきり付与することであった」と書いているように、science イコール実証科学ではなく、古い science モデルを観察にもとづく実証科学へと進化させることが主張されているのである。端的に言えば、人間精神は推理から観察へと歴史的に発展する。まずは自然科学を捉えたこの観察的精神が、人間の諸活動を包摂し、新たな人間科学を組織すること。これがサン＝シモンの根本関心であった。

サン＝シモンのほかにも、19世紀には、諸形態の歴史的転変や進化や進歩が継起するという観点で、人間存在を歴史性において了解可能にしようとする「統一学 unified science」の構想が、次々提出された。サン＝シモンの弟子、オーギュスト・コントは、人間精神が神学的＝虚構的段階から形而上学的＝抽象的段階へ、さらには科学的＝実証的段階へと段階的に発展すると見る（『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』1822）。ヘーゲルは、『精神の現象学』（1807）や『歴史哲学講義』（1838、死後公刊）などで、精神が、自己を実践的に外化しつつ、また、この外化を再び揚棄しつつ、理性目的を実現していく歴史過程をたどる、と見た。マルクスも、近代社会の歴史的生成と展開、それがはらむ構造的諸矛盾、危機、闘争を通して、「自由な諸個人の連合」としての未来社会が生成するとみた（『ドイチュェ・イデオロギー』1845／46）。ダーウィンは、個体のランダムな変異と環境の変動を通して「自然選択」が行われ、生命が歴史的に進化すると考えた（『種の起源』1859）。いずれの場合も「人間科学」という表現はないように思われるが、啓蒙期の「人間本性」視点を「歴史存在としての人間」視点へと大転換することにより、人間研究に新たな地平を切り開いたのである。

しかし、サン＝シモンやコントを、自然科学モデルを人間認識へと拡張する努力として捉えると、J・B・ワトソンら合衆国の行動主義心理学などが浮かび上がってくる（『行動主義』1930、安田一郎訳、河出書房、1968）。彼らは自然科学モデルで心理学を再編し、「科学的」人間認識の上に人間生活の改善を行うという啓蒙のビジョンの延長線上に自己を位置づけようとしたと言えるだろう。新行動主義のB・F・スキ

ナーが、一方で環境決定論的姿勢をとりつつ、他方でユートピア主義者でもあったということも、興味深い連続性を示している（『自由と尊厳の彼方』1971、波多野進ほか訳、番町書房、1972）。ここでは人間科学は行動工学や人間工学へと展開をとげるのである。

（3）シュトラッサー『現象学と人間に関する経験科学』

19世紀末から20世紀にかけて、実証諸科学の分化・細分化が進んだ。その結果、the human sciences は、単なる「総称」「カバー」「傘」として用いられるようになる。しかしこの時期に、人間活動を扱う学問の基礎付け（客観性、妥当性）をめぐる哲学的方法的論争がなされ、「人間科学論争」と呼ばれている。解釈学（ディルタイ）、現象学（フッサール、メルロ＝ポンティ、シュトラッサーなど）、理解社会学（ウエーバー）、ずっと後になるがマルクス主義（L・ゴルトマン）などがこれに関わる（丸山高司『人間科学方法論争』勁草書房、1985、ほか参照）。ここではシュトラッサー『現象学と人間に関する経験科学（Erfahrungswissenschaft vom Menschen）』（1962、徳永恂ほか訳、『人間科学の理念』1978、新曜社）を紹介しておこう。

シュトラッサーは「人間に関するすべての科学」を「人間諸科学」（「人間についての経験諸科学」）と呼ぶのではなく、解剖学や人間生理学など自然諸科学に属するものを除外する。人間の活動や行為、およびそれらが媒介したり産出したりする領域（「人間が自分で作り出し形成する世界」）を対象にする「経験科学」のみを、したがって「自然としての人間」でなく「人格としての人間」を扱う諸科学のみを、「人間諸科学」に数える。歴史学、言語学、比較宗教学、芸術や文学や文化や法律や経済に関する科学、そして心理学、社会学などがそれに属する。

シュトラッサーは経験的人間科学が掲げる「客観性」の三つの難点をあげる。第一に人間科学的研究自身が対象に対して再帰的關係に立ち対象に変化を生んでしまう。第二に自由な行為に関する経験的研究など可能かという問題。第三に価値判断や動機や目的設定にかかわる帰納的推理は困難であるという問題である。これらの問題を解決するためには「他の存在者との弁証法的連関の中で、人間の実存を記述し解釈する」哲学である「現象学」と人間科学は結びつかねばならず、経験科学とは異なる「根源的明証性」も認めねばならない。シュトラッサーによれば科学的思考は人間の自己了解の一位相にすぎず、自己了解自身は弁証法的に展開するものなのである。人間の実存の本質を洞察する現象学はこの展開に貢献することができる、と。

(4) フーコー「人間諸科学の考古学」とロジャー・スミス「歴史的転回」

先に見た「人間科学論争」は、人間科学の認識の客観性や妥当性をめぐるものであり、いわゆる認識論的性格のものであった。しかしフーコー『言葉と物——人間諸科学の (des sciences humaines) 考古学』(1966, 渡辺一民ほか訳, 新潮社, 1974) は、人間科学を、近代に特有な「エピステーメー」(真理認識の諸条件の歴史的枠組み)の一部として、またそれらが生活者に対してもった権力性において、「考古学」的に、つまり層をなす諸「エピステーメー」の対比を通して、特徴づけた。それにより人間科学をめぐる論争に新地平を拓いたのである。

フーコーでは人間諸科学は、あくまで19世紀に始まり、心理学、社会学、文学・神話研究などからなり、自然(本性)主義(古典主義)から人間主義(近代主義)を通して構造主義に至る「エピステーメー」の層的構成の中の人間主義層をなしており、精神分析学や文化人類学や構造言語学などの登場と共に、20世紀の半ばには終焉を迎え、古層となりつつある何かである。

しかし現在の人間科学研究の中心人物であるロジャー・スミスは、むしろフーコーから新しい「人間科学」が始まると、読み込んで行く。彼によれば新しい人間諸科学は、「正統とされる知識の近代システム」に対する「批判的反省」を意味するが、それは同時に「特定の時間と場所における人間活動の、歴史的、エピステーメー的諸条件を分析し批判する」、「客観的知識として受容されているものが、どのようにして歴史的ないし人間的に構成された諸過程を通して創出されるのかを理解しようとする」という、積極的な認識でもある。ロジャー・スミスはこれを人間諸科学の「歴史的転回」として捉えようとするのである(後掲資料のロジャー・スミス「人間諸科学——その歴史、その社会学」参照)。

(5) 人間生物学としての人間科学

生物としての人間をあつかう「自然人類学 (the physical anthropology)」の歴史は古く、1501年のマグヌス・フント『人間の尊厳についてのアントロポロギウム』は人間身体の解剖学的生理学的構造をあつかったものとされる(茅野, 前掲書)。つまり anthropology という言葉は、むしろ人間身体学からはじまったと言えるかもしれないのである。現在でも、この流れで「人間科学」という言葉が用いられているが、19世紀の生物学革命や、現在の脳科学、遺伝子研究の展開を背景に、生物学革命のいわばナポレオン戦争の波及として、人間に関する新たな統一科学の試みも見られる。

竹内哲郎(ほか)『人間科学』(ソルト出版, 1984)は、「新しい人間科学としてのヒューマン・バイオロジー(人間生物学)の立場から医学・人類学・生物学を超えた

新しい人間像を求めようとしている」(はしがき)。構成は「人類の進化」,「人口問題」,「ヒトの生殖」,「ヒトの遺伝」,「人類の行動(脳と文明)」の順である。

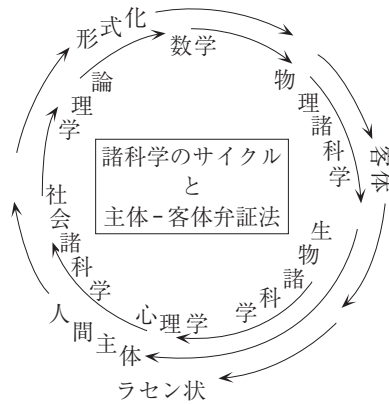
養老孟司『人間科学(The Human Sciences)』(筑摩書房, 2002)はもっと野心的である。「ヒトとは何かという問いに科学の視点から考える」のが「人間科学」である。「生物学は情報科学だった」とみる養老は, 脳-言語系(社会系)と細胞-遺伝子系(自然系)の二重の情報系からなる「情報システムとしての人間」を原理に, 新たな「人間科学」に挑戦している。実体(脳や遺伝子)は不断に変化するが情報は同一でありつづけるというのが, 彼の存在論的テーゼである。この本は単に人間生物学に限定されず, 統一科学としての「人間科学」を目指すものであって, 6章からは, 都市→人→言語→自己→身体→男女へと展開を試みている。もちろん統一科学としての「人間科学」は単なる理念(プロセス)にとどまるのであって, 諸領域への展開は若干の着想提示のみという印象をあたえる。

(6) 水島恵一による学際的総合叙述としての「人間科学」

水島恵一(編著)『人間科学入門』(有斐閣双書, 1976)は, 1976年に発足した共立女子大学人間科学部のスタッフによる共著である。叙述は, 遺伝と本能→脳→初期発達→社会化→家族→地域→福祉→パーソナリティーの順で, 専門分野では生物学→教育学→社会学→心理学の順で, 進めている。ここで言う「人間科学」の実質は, 「人間」に関する総合的叙述の試みを, 学際的な協力でやったということだろう。概念的に厳密な分業というより, 同じ学部組織されたものという歴史的偶然的な条件に制約されて分担している印象もぬぐえない。最終章で水島は「人間科学の領域と方法」を書いている。ここでは「総合人間科学」としての「人間学」「生活学」「児童学」「教育学」「人類学」「福祉学」への言及があるが, 本来の人間科学との関連が不明である。

(7) ピアジェ「科学体系における人間の諸科学の位置」

ピアジェは『科学体系における人間の諸科学(sciences of man)の位置・序説』(1970, 波多野完治訳『人間科学序説』, 岩波書店, 2000)で人間の諸科学を, 学知の主体-客体弁証法サイクルの中に位置づけている(次頁の図, 参照)。「諸科学はひとつの終わりのない螺旋形をしている。その円環性は決して悪しき円環(悪循環)をなすのではなくて, 主体と客体との弁証法のもっとも一般的な表現にほかならない。」「人間諸科学は科学のうちで, いちばん複雑で, かついちばん困難なものである。しかし他面, それは科学の円環のなかでめぐまれた特権的位置を占めるものである。そ

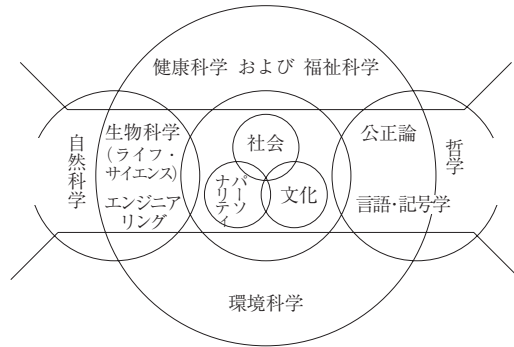


れは他の諸科学をつくりあげる主体を研究する科学である。したがってそれはどうしても主体から切り離されるわけにいかぬ。」「人間主体の真の位置とは何か。それは生物物理的客体のパースペクティヴから見ると、その終点であり、同時に、行動および思考という見地から見ると、創造者としての出発点であるという、二つにして一つなる位置である。」(同、第6章)。

ピアジェのこのサイクルは、人間諸科学を孤立的になく、諸科学全体の相互移行性において捉える、ピアジェならではのスケールの大きい構想である。しかし科学知が科学知だけで弁証法的サイクルを成立させるような印象を与えるのはまずい。生活と科学との相互移行性はもとより、日常知、技術知、哲学知、科学知を相互移行性において見る、知の全体化の姿勢が必要であろう。

(8) 塩原勉「知のネットワークとしての人間科学」

中島義明ほか『人間科学への招待』(有菱閣, 1992)は大阪大学人間科学部創立20周年を記念して出版された。残念ながら20年間を経過した現時点に立って、現実による検証を行うという観点でのまとまった議論がない。相変わらず一般構想を開陳しあっているという印象が強く、読者としては不満が残る。巻頭の座談会「人間科学とは何か」で塩原勉は、人間科学を統合科学として捉えることに反対し、社会科学、人文科学、自然科学、哲学による「知のネットワークとしての人間科学」を提唱している。彼によれば、人間科学の関心(焦点)は「生活する人間」「人間の生活」にある。諸科学のフェデレーション(提携)は外からの実践課題と内からの理論課題の両面をもつ。フェデレーションの中で各専門分野が成長する。しかし専門家養成を軽視することに強く反対している。次の図が添えられているが、端的に言えば、塩原にとって人間科学は研究組織のあり方を表す組織論的概念なのであって、一階部分には従来の専



門諸科学をおき、2階部分にフェデレーションとしての人間科学を置くということだろう。ただし、「生活する人間」「人間の生活」は日常生活を指すのか、人類史的射程も入れるのか、それとも直面する生活上の＜問題＞に焦点を当てるといふ意味なのか不明である。「生活する人間」「人間の生活」は広く取れば、人間そのものであって限定を欠く。

Ⅲ 学部学科名称としての人間科学

次に学部学科名称としての人間科学を見てみよう。学問の世界で人間科学が頻繁に語られるようになったのは1980年代以降のことであるらしい（R・スミス後掲資料参照）。日本では大阪大学で人間科学部が創設されたのが1972年であるが、その後、学部学科名称として人間科学を用いる場合が急増しており、すでに100を超えているとされる。高校にも人間科学科が見られる（和歌山県立貴志川高校）ほどである。もちろん、ある組織がある名称を冠する場合の実質的な意味はさまざまでありうる。その組織の「魂」、結集軸を端的に表す場合もあるし、妥協の産物である場合もあるし、文部省対策でもありうるし、外部の好印象を当てにした、実質を伴わない単なるプロパガンダの場合もあるだろう。したがって組織名称から人間科学とは何かを限定するのは、徒労とも言える。学問の革命は、通常は、明瞭な概念群や命題群、強い信念、既成の学問に対する激しい対立、を通して遂行されるということを考えると、実在する教育研究組織の名称にまといつく、際立った＜杜撰さ＞さは、徒労感を大に加重する。しかし、学問や教育組織の再編成にかかわる歴史的現象として人間科学を見る、という視点に立てば、これらの＜杜撰さ＞を介して＜何が＞生起しているのかに関心を持つ必要がある。単に「俺の考える人間科学はこうだ」という思い込みだけでは、人間科学にかかわる動向の歴史的意味の解説はできないだろう。

一体、人間科学をめぐる諸動向を介して何が進行しているのだろうか。おそらくひ

とつではない多くの意味がそこに含まれるだろう。学問の対象、学問の方法、学問の社会的機能、学問の研究・教育組織、をめぐって何が生起しているのか。当事者意識はこれをどう意味づけているのか。こういう目で、まずは経験的現実を観察してみる必要がある。

我々は、その手段としてインターネットで検索してみた。Yahoo のアメリカ、イギリス、カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、そして日本で、「人間科学」を冠した学部、学科、コースの、そしてまた大学院や研究所の、ヒットしたすべての事例にあたり、その趣旨説明と学科目編成ないし課程編成に当たってみた。検索時期は2002年の10月から11月である。ここでヒットした事例が、現実をどの程度とらえているのかは、まったく検証していない。また、それぞれの学部、学科が何年からどういう経緯ではじまったか、スタッフ、学生数はどれほどか、カリキュラムの基本はどうかなど、多くの基本事実も未調査のままである。これらの意味で、以下はまったく暫定的な作業にすぎないことをお断りしておく。

(1) 米英が中心である

今回の検索で、米英を除いて、日本以外、人間科学を学部学科名称として用いている大学はきわめて少なかった。つまり、大学の学部学科名称として人間科学を用いているところは、おそらくアメリカ、イギリスが中心だろうと思われる。

ドイツでは、1996年に設立された旧東ドイツのポツダム大学に人間科学部（心理学、言語学、音楽、スポーツ、テクノロジー教育、小学校教授法、教員養成用芸術・教育研究、教員養成用教育研究）があるだけであった。ドイツ語圏のオーストリーでは「人間科学研究所」が見つかった。これはウィーンとボストンにある研究所で、東西ヨーロッパの研究交流を目指し、半年間の滞在で東欧民主化に寄与しようとするものである。ただ「人間科学」という呼称との関連は不明であった。

イタリアでは Auburn 大学に「人間科学カレッジ」があったが、この Auburn 大学はアメリカの大学であり、そのイタリア校ということであろう。フランス語圏ではカナダ・ケベック州の Sherbrooke 大学の「文学・人間科学部」が検索できただけであった。フランスではパリの「人間科学館（La Maison des Sciences de l'Homme）」が検索できただけである。これはフェルナン・ブローデルが中心になって、人間諸科学の再編と先進的共同作業の組織化をめざして1963年に創設されたものである（F・ドス編『ブローデル帝国』1986、浜名優美訳、藤原書店、2000、所収のO・デュムーラン「人間科学の起業家」参照）。

米英以外では、そのほか、カナダの Guelph 大学の「社会科学・応用人間科学カレ

ッジ」と南アフリカの Natal 大学「人間科学部」、それに国連の「人間科学アカデミー (The Academy of Human Sciences)」が検索できただけであった。後者は1977年に WHO 30周年を記念して設立され、国連平和大学の「補助医学のための国際オープン大学」と結びついている。催眠法やセラピーなどの教育が中心らしい。

厳密な検索でないので推測にとどめるが、以上の事実から、もともとあまり人間科学という言葉の伝統をもたないドイツはもとより、心理諸科学や社会諸科学をカバーする言葉としてあまり限定せずに人間科学を用いているフランスなどでも、学部学科名称としては人間科学という言葉は基本的には用いていないと思われる。つまり人間科学部とか人間科学科という名称は基本的には米英中心のものであると推測される。

(2) human beings と human well-being

そこで米英を中心に、学部学科名称としての人間科学を調べていくと、第一に、自然科学以外の心理諸学や社会諸科学などをカバーする伝統的意味での人間科学、第二に「人間のよき生活 (human well-being)」(実生活上の安全、健康、発達、快適、効率など) のための応用研究という意味での人間科学、第三に「人間存在 (human beings)」の総合研究という意味での人間科学の、三つにグループ分けできるように思われる。第二グループはむしろ「応用人間科学 (applied human sciences)」と呼ぶべきかもしれない。事実、Colorado 州立大学は「応用人間科学カレッジ」を、前述のとおりカナダの Guelph 大学は「社会科学・応用人間科学カレッジ」を、日本の立命館大学大学院では「応用人間科学研究科 (英文は graduate school of science for human services)」をそれぞれ名乗るなど、少数ながら直接「応用人間科学」を名称とするところもある。第三グループの human beings の総合研究も実践的問題意識をもつが、どちらかといえば、いわば人類史的射程の実践ないしオールタナティブな実践に関心をもつと言えよう。これに対して human well-being のための応用研究は、どちらかといえば産業上、日常生活上の実践を扱うと言えるだろう。英米でも human well-being のための応用研究が中心の場合が多く、日本の新設された人間科学部の多くも、実質は応用人間科学部に近いように思われるが、その場合でも「人間存在 (human beings)」の総合研究の側面を問題意識としては一応は語っている大学も多く見られる。

(3) 心理諸科学や社会諸科学をカヴァーする名称としての人間科学

まず第一グループから持ておこう。イギリスの Brunel 大学の教養・社会科学部人間科学科は、心理学、社会人類学、社会学、コミュニケーションとメディア研究とい

う4分野からなっている。同じくイギリスの Surrey 大学人間科学スクール (School of Human Sciences) は経済学, 心理学, 社会学の3つの学士コースからなっている。おなじくイギリスの Plymouth 大学「人間科学部」は刑事上の正義研究, ヨーロッパ研究, 健康と社会ケア管理, 国際関係, 助産学, 看護学, 足病学, 政治学, 心理学, 社会政策と行政, 社会調査, ソーシャルワーク, 社会学のコースからなり, 「我々の焦点は, もっとも親密な個人レベルから社会や国民の仕事まで, 人々が生活関連の仕事にはげむさまざまな仕方を理解することである」としている。これは第一と第二の両方の性格を兼ねているケースであるように思える。スコットランドの Stirling 大学人間科学部 (応用社会科学, 教育 Institute, 看護・助産婦, 心理学の4学科) も同じだろう。前述のカナダ・ケベック州の Sherbrooke 大学の「文学・人間科学部」は経済学, 地理学および遠隔探査, 文学とコミュニケーション, 歴史と政治学, 音楽, 心理学, 社会サービスの7学科からなるが, この場合の「人間科学」も心理, 社会諸科学のカバー名称として用いられているように思われる。

このように心理, 社会諸科学のカバー名称として人間科学部人間科学科を用いている例は, それほど多いとは言えない。

(4) human well-being のための応用研究としての人間科学

次に human well-being のための応用研究中心のグループを見ておこう。イギリスの Loughborough 大学科学学部 (理学部) の「人間科学科」は「人間工学, 人間生物学, 人間心理学の教育研究からなるマルチディシプリナリーな学科。350人の学部学生, 30人の大学院生と20人の研究生, 10人の調査スタッフ, 25人の専任スタッフからなる。我々の仕事の焦点は, 我々の身体的精神的な健康, 安全, 発達, 効率あるいは喜びにかかわる限りで, 現実世界の人々のきわめて多様なニーズを理解し, そのニーズを充足するのを援助することである」とされる。おなじくイギリスの Essex 大学「健康科学・人間科学部」は健康・社会サービス研究所の成功の上に設立された多分野的学部とされている。

アメリカの Florida State 大学の「人間科学カレッジ」は家族・児童科学, 栄養・食品・訓練科学, 衣料・消費科学の3つの学科からなり, 「人間科学カレッジは個人, 家族, コミュニティーの健康と発達に取り組む多分野共同の研究教育ユニットである。人間科学カレッジは3つの学科で10のプログラムを提供。学部登録生1350, 大学院生170名」とある。Texas Tech 大学の「人間科学カレッジ」は1925年設立で, 教育・栄養・レストラン・ホテル経営, 人間発達と家族研究, 商業・環境デザイン・消費者経済学の3分野をもつ。Colorado State 大学の「応用人間科学カレッジ」は消費者・家

族研究, デザイン・商業, 食品化学・人間栄養学, 健康・訓練科学, 人間発達・家族研究, 製造工学・建築管理, 職業的セラピー, 教育スクール, ソーシャルワークの9分野をもっている。Mississippi State 大学農業・生活科学カレッジの「人間科学スクール」は人間科学, 農業情報科学・教育の2専攻からなり, 「人間科学専攻」は衣料・繊維・商業, 食品・栄養, 人間発達・家族研究, インテリア・デザインの4重点科目をもっている。

カナダの Guelph 大学「社会科学・応用人間科学カレッジ」は家族関係および応用栄養学, 消費者研究, 経済学, 心理学, 政治科学, 社会学と人類学, 地理学, ホテルおよび食品管理スクールの8分野に分かれている。Auburn 大学イタリア校の「人間科学カレッジ」は栄養学と食品科学, 消費者問題, 人間発達と家族研究の3分野をもち, 人間科学について次のような位置づけを与えている。「人間科学の特徴は, その中心に human well-being を据えた interdisciplinary な学問だという点にある。」「我々は人間の健康と well-being に関心をもって価値あるものを相互に結合することを研究する研究者である。ビジネスや産業や政府は, 消費者に安全で質のよい製品やサービスを提供する点で我々と手を組んでいる。他者との積極的な相互行為のために必要なスキルを教えつつ, 我々は専門家として, 子供や若者のためのプログラムを開発する。我々は家庭や仕事関係や環境をより満足するものに構築する上で人々を援助する。」

見られるとおり, human well-being のための応用研究としての人間科学を構成しているのは, 人間工学系, 生活科学・消費科学系, 健康科学系, 家政学系, 生活関連ビジネス系など, 実に雑多な分野で, 整理しきれないほどである。米英でも社会的ニーズや学生数という面からすると応用人間科学に比重がかかっていると思われるが, ポスト・フォードイズム経済の特徴として, ヒューマン・インターフェース領域での多様なサービスへの需要が拡大していると言われており, これに関連させて「応用人間科学」の意味を探ることができるのかもしれない。もう一つ注目すべきは, 日常的産業的实践への応用だけでなく, 市民的, 世界市民的实践への応用も多く見られるようになっているということである。

(5) Durham 大学「人間科学課程」と Oxford 大学「人間科学コース」

第3の, human beings の総合研究中心の人間科学グループには, イギリスの Durham 大学と Oxford 大学, アメリカの George Washington 大学大学院などが入るように思われる。これも数はそれほど多くはないが, 学問的挑戦と言う意味では大変注目される。

Durham 大学の Stockton キャンパスには「人間科学教養学士課程 (Human Science

BA (Bachelor of Arts) degree)」、 「健康・人間科学理学士課程 (Health & Human Sciences BS (Bachelor of Science) degree)」、 「人間科学理学士課程 (Human Science BS degree)」の3つがある。これらはすべて「人類学課程」であるが、ダーハムのメインキャンパスにある「人類学課程 (Anthropology degree)」から区別して、「人間科学課程」と呼ぶことにした、ということである。いずれも、ダーハム大学の人類学科 (anthropology department) の研究スタッフによって教育される。「人類学は文化横断的 (cross cultural) な性格と歴史的アプローチによって特徴づけられる。」「人間科学教養学士課程は社会的文化的アスペクトを強調しつつ、社会生物学と人類学の研究の総合的アプローチを提供する。健康・人間科学理学士課程も同じであるが、医療人類学を特に強調する。前者は単位の3分の2は社会関連で、3分の1が生物関連であるので教養学士課程なのである。後者では生物関連の単位の比重が大きい。人間科学理学士課程は人類学の中の生物学的アスペクトへの学生の関心にこたえて作られた。」「人類学は生物学的と社会的の両方のアスペクトをもっている。」「例えば、第1学年で、世界的に見られる食物の象徴的役割、拒食症はなぜ主として西側社会で見出されるのかといった問題に取り組む。第2学年では第1学年で学んだ、社会に由来する信念や習慣や価値の生物学的効果を考える。このようにして2年次の最後には食物と健康というテーマで社会的と生物学的の二重の展望を持つことになる。そして第3年次には進化、エコロジー、行動といった異なる文脈でさまざまな個別テーマを統合する。」

Oxford大学の「人間科学コース (Course of Human Sciences)」も、「生命・環境学部人類学スクール」が開設している。「人間科学コースは、人間たちを生物学的、社会的、文化的な種として研究し、オックスフォードで提供されているいくつかの一層伝統的な諸コースに対する挑戦的オルタナティブを提供する。この課程は、学生が人間たちを進化生物学と社会諸科学という対照的なパースペクティブから研究することを可能にし、両者を結びつけることを可能にするような、分野横断的な学問的訓練を提供する。遺伝子学、進化生物学、そして社会諸科学における前進が、急激に変化しつつある世界の諸問題に適用される必要があるようなこの時代には、さまざまな人間諸科学の間に架橋することは重要である」と、総合研究の挑戦的意義を強調する。

人間科学コースの開設経緯については、次のように指摘している。「人間科学課程コースは1960年代、オックスフォードにおける生物学と社会諸科学の学者たちの間で行われた討論から生まれた。この討論の目的は人間存在の研究における学際的なアプローチを創造するという点にあった。全大学的討論ののち、人間科学コースが1969年に発足した。学生定員は初期の15人から45人に増えている。」

年次別の学習目標も紹介しておこう。「本コースは講義と個別指導、それに生物学

的課題での若干の実験を基本にしている。講義は必要な素材のほとんどを紹介し、コア概念や理論を提供する。週1回の個別指導ではより深く特定の問題に取り組む。3年目の最後に人間科学課程のコアをなす以下の主題に関し徹底した基礎知識を得るだろう。(1)行動、それはどう進化するか、(2)人間遺伝学、(3)人間たちとその環境、(4)人口統計学、(5)社会的文化的文脈で見た人間。さらに、二つのオプションから選択し、長い論文を書く。」

「(1年目)本課程のコア分野の紹介。(1)人間を含む有機体の生物学(生態学、人間生理学)、(2)遺伝学と進化、(3)社会、文化、環境(比較研究、都市の成長)、(4)社会学と人口学、(5)人間科学のための量的方法。(2年目)(1)行動とその進化(人間行動の進化的起源、人間行動が他の種の行動と共通するもの、人間に独自なものはなにか。人間の文化過程と遺伝過程の関係)、(2)人間遺伝学と進化(ヒトゲノム組織、人間の遺伝的分化、病気の遺伝子)、(3)人間エコロジー(環境を作りつつ環境によって作られる人間、栄養、病気、再生産のエコロジー、文化と生物学が相互作用する無数のやり方)、(4)人口学と人口(出生、死、高齢化、移住の量的データ、結婚、戦争、家族構造などの影響)、(5)人類学的分析(社会人類学や文化人類学の一般原理を今日の西欧社会や非西欧社会に適用、個人的アイデンティティーと集合的アイデンティティー、教育、ナショナリズム、イデオロギー、新たな電子技術やバイオ技術に対する文化的反応)と社会学的理論(階級、ジェンダー、逸脱、社会規範、マルクス、ウエーバー、デュルケームの諸観念を用いる社会構造と個人行為の関係へのさまざまなアプローチ)。(3年目)次のオプションから二つ選ぶ(発達心理学か社会心理学、と行動、伝染病の生物学、健康と病気、都市地理学と社会地理学、産業社会の社会学、選択した地域の社会人類学、言語、量的方法)、それに長い論文(5000から10000語、本コースの学際的な特性を反映しなければならない)。学部生論文のこれまでの事例、「人間生活における音楽はどうして普遍的か」、「カニバリズムの生物的文化的進化」、「ブリテンにおける人種と教育達成の違い」、「自発的無出産」、「インドにおけるHIVの疫学と伝染」、「青年期の妊娠」、「犯罪行動」、「精子数の減少の原因と結果」。

(6) George Washington 大学大学院「人間科学プログラム」

この「人間科学プログラム」は全米302の博士課程「人文諸学(humanities)プログラム」の第16位にランクされているということである。つまりイギリスのDurham大学「人間科学課程」とOxford大学「人間科学コース」が、ともに「人類学」をベースにした学士課程であるのに対して、こちらは「人文諸学」をベースにした学際的プログラムである。また以下に紹介するとおり、フランスやドイツの現代思想の受容

を公然とうたっている点も、大きな特徴である。

「過去何世紀もの間、人間存在や人間コミュニティーの研究が専門分野や専門分野群（人文諸学、社会諸科学、自然諸科学）に分けられて、成果を収めてきたにもかかわらず、人間諸科学はこの研究に、人間複合体を説明するために発達してきたマルチプルな洞察、方法、分野を統合するというパースペクティヴで、アプローチする。別々の範疇への人間知識の分割が文化的、歴史的なものであるということを了解しつつ、人間科学は、これらの専門分割から何が獲得されたのかを考えると同時に、知識のどんな新諸形態がこれら専門間の会話の中で／を通して生産されうるかを考える。」

「人間科学は、量的なものより、研究の解釈的批判的な様式を用いるという点で、まず第一に、人文諸学と社会諸科学の間の共通の土台に位置を占める。研究の批判的様式に対する我々の中心的コミットは、人文諸学においても社会諸科学においても、過去数十年間のもっとも興味深い仕事のいくつかが、＜話し方や書き方がどのように知る仕方を告げ、形作るか＞ということを考える仕事であった、という信念から来ている。量的方法それ自身は、我々が世界の意味を構成するために持ちいる諸言語のひとつであるが、しかし量的アプローチは人間科学プログラムにおいても価値を有し、研究される。」

「人文諸学と社会諸科学の共通の土台を研究する＜実践＞は、相互影響の実践としてもっともよく記述される。一方で社会科学者たちが文化的活動の美学化（それは文化的活動を社会的文脈から遠ざける）を批判しうるが、人文諸学の学者たちは、人間行動の客体化（それは諸個人や諸コミュニティーに知識の主体としてより客体としてアプローチする）に反抗しうる。」

「人間科学の教員や学生の関心は、ある理論的／哲学的集積、とりわけフランス構造主義やポスト構造主義やドイツ批判理論から生じた諸観念の集積の結果である。これらの集積は、さまざまな領域における文化の分析がますます広範となり、ますます理論的に基礎づけられたものになっているために、異なる領域の学者たちがそれらを横断する形で同じ問題を論じることがほとんどなくなっているばかりでなく、現実には同じ知的作品（フーコー、ラカン、ボヴォワール、ファノン、デリダ、ブルデュー、アルチュセール、ハーバーマス、リクール、ロールド、Anzaldúa など）のいくつかを読み、論じており、それを自分自身の分野の中で利用しているということの結果生じているのである。これらの作品はこの人間科学プログラムへと導いた。そこでは異なる分野の学者が類似の論題に関心を持っているばかりでなく、共通する言語の可能性を開拓できるのである。そのような現実を制度化することは、本物の学際的な仕事を増大させ、深化させる。」

「人間科学プログラムの方法を概念化する簡潔なやり方は、それを三つの原理／実践へと三角形化することである。第一に解釈学的、エピステモロジ的分析、第二にテキスト分析、第三に文化と社会の批判、である。最初は、第一が哲学、第二が文学、第三が人類学と社会学、というように、特殊分野の方法が思い浮かぶだろう。しかしすぐにわかることは、これらの方法がひとつの分野に固定されてあるのではないということである。分野ごとの事象や方法は、新たな文脈の中で広く共有され、持続的に再解釈される。たとえば解釈学的エピステモロジの厳格さがきわめて多様な社会的文化的事象に適用されるとか、テキスト性は記述様式から陳述様式へだけでなく、視覚様式や口聴の様式（音楽など）へと拡張されるとか、社会的文化的構成体はテキストが生産され消費される場所として再認されるとかである。」

「本 Programm の強みは単に、関心と実践の共通するこれらの領域を結びつけ、それによってそれらの複合的相互関係に注意を向けるという点にあるだけでなく、また歴史的深部（「のみ」ではないが「とくに」西欧的伝統など）へと、また文化横断的な研究と比較へとそれらを集中する点にもある。」

「（専門分野と学際性）人間科学プログラムが三つのキー分野（つまり専門的基礎固め、クロスカルチュラルな調査研究、それに歴史的深部）に与えている優先権は、合衆国における学際的な教育への明確な寄与の特長を示している。第一に、ジョージ・ワシントン大学における人間科学プログラムは、その企画の中心に専門的研究を置いている。第二に、それは一貫してクロスカルチュラルな研究を促す。これには非英語圏や非西欧社会に関する専門分野の研究も含まれる。そして第三に、その仕事を歴史的に基礎づける。本プログラムの焦点は単に文化や社会の歴史や歴史性にのみ置かれているのではなく、「何が歴史としてカウントされるのか」「言語や／または権力の問題はどのように我々の歴史理解を創造し、複雑化するか」といった問題へと導きつつ、批評や理論の個人的な分野にも焦点が置かれる。」

「専門分野はそれ自身の本性によりその研究の限界を引く。学際的な研究の優越点は、最初に専門的研究の価値を認めることにあるだけでなく、その不可避的拘束に注意を向ける点にもある。人間科学プログラムは所与の専門研究がインターディシプリナリーな研究により、いかに価値を高めるかという最初の強調を取り除くことはない。むしろ学生の間人科学研究プロジェクトには、ひとつの専門分野に基礎を置くとともに、いくつかの他の分野を横断するような仕事が必要である。専門分野のそれぞれのために、人間科学におけるコア諸コースの教育のための教授団が最近作られたが、これはインターディシプリナリーな仕事のもつ異なる優位点である。そしてこれらの優位点は相互に関係している異なる専門分野に依存している。」

(7) 日本の学部学科名称としての人間科学

名古屋市立大学人文社会学部人間科学科は心身相関係、学習と形成系、社会と人間関係系の3つの教育分野をもつ。琉球大学法文学部人間科学科は人間行動、社会学、地理・人類学の3専攻課程からなり、人間行動専攻課程は哲学・倫理、言語学、教育社会学、教育心理学、臨床心理学の5履修コースを含む。大阪樟蔭女子大学人間科学部は応用社会学、心理学、児童学の3学科をもつ。文京大学人間科学部は人間科学科、臨床心理学科の2学科をもち、人間科学科は心理学、社会文化、人間教育、社会福祉4コースからなる。これらはどちらかといえば、第一の伝統的カヴァー概念としての人間科学だろう。

また、早稲田大学人間科学部は従来、人間基礎科学科、健康科学科、スポーツ科学科の3学科からなっていたが、2003年4月から人間環境科学科、健康福祉科学科、人間情報科学科に改組された。その際、基礎研究／応用研究の2分法からの脱却がうたわれている。大阪経済大学人間科学部人間科学科は人間心理追求、クオリティーオブライフ支援、マルチクリエイター養成、多文化理解の4履修モデルを出している。大阪人間科学大学は大学名に人間科学を冠し、2学科（人間環境学科、社会福祉学科）のうち人間環境学科は、総合的教養、人間と精神行動に強くなる、ものづくりとカラーコーディネーターを目指す、住環境デザインを目指す、インテリアプランナーを目指すの5つの履修モデルを出している。大阪国際大学人間科学部は心理コミュニケーション、国際コミュニケーション、人間健康学、スポーツ行動学の4学科からなる。神戸女学院大学大学院人間科学研究科前期課程は臨床心理学、人間行動学、環境科学、健康科学4専門分野、後期課程は臨床人間科学、人間環境科学2専門分野からなる。立命館大学大学院応用人間科学研究科は臨床心理学、対人援助学の2領域からなる。また横浜国立大学、山梨大学、新潟大学には教育人間科学部がある。これらは、どちらかといえば、応用人間科学に属するだろう。

大阪大学人間科学部人間科学科には学部7履修コース（人間行動学、行動生態学、社会学、人間学、臨床教育学、教育環境学、ボランティア人間科学）があり、大学院9講座（学部7コースに先端人間科学、健康人間科学を加える）がある。大阪大学人間科学部紀要創立25周年記念別冊（1998）の、以下のような文章を見る限り、「領域的には人文諸科学と相覆い、自然科学に対しては開かれた態度をとる」「学際的・総合的な人間科学の建設という理念」を堅持しており、日本では数少ない第3グループの、Human Beingsに関する総合研究としての人間科学に属すると見られる。

「人間科学部を構想する初期においてその発想のヒントになっていたのは、アメリカの文化人類学などに見られたサイエンス・オブ・マン（science of man）の理念で

あったように見える。これはたとえば「文化とパーソナリティ」などの学際的研究のために要請された、人類学・社会学・心理学などにまたがる統一科学的理念のシンボルであった。しかしアメリカでは、この統一科学的要求としてのサイエンス・オブ・マンの理念は、しだいに「行動科学」の理念にとって代わられることになった。しかし人間科学部の学部構想においては、自然科学的方法の一元論をとる行動主義から、終始一線を画していたように思われる。」

「むしろその範として考えられていたのは、フランスにおいて発達してきたシアン・ジュメヌ (sciences humaines) である。これは人間を対象とし、経験的方法を重視する諸科学を総合する分類概念であり、「領域的には人文諸科学と相覆い、自然科学に対しては開かれた態度をとる」ことを特色とする。」

「本学部がさしあたり心理・社会・教育の3部門を母胎として構想されたものであるかぎり、それは人文科学の全領域と相蔽うとはいいがたいであろう。それはまず「人間の行動・社会・教育についての諸科学の総合的協力研究 (インターディシプリナリー・スタディー)」によって、「現代という未曾有の転換期の学問的・社会的要請にこたえる」ことを目的とするものである。しかし本学部が、「人間科学」を旗印として掲げるということは、この学部が、その野心からすれば、けっして教育学部の代替物や、従属的な第二文学部をめざすものではなく、より広く、文科系と理科系とに開かれた媒介交流の場であろうとすることを示している。学際研究とは、たんに心理・社会・教育の3部門の学際研究に尽きない広い地平で考えられている。このような態度は、当然、現代における人間の諸問題についての総合的知見を要求することになるだろう。今日、学問はただ個別的な問題の解明や、それによる自己の学問の進歩だけに専念すべきではなく、人間や社会の全体的把握のために、個々の成果を総合する方向に努力すべきであり、そのような学問的指向性が、人間科学部の創設の理念だと考えられる。」

「しかしそういう総合的認識は、諸科学の成果をただ寄せ集めることによって到達されるものではない。それは自己の専門性を深めつつ、同時に、どのような技術的な問題でさえ、「人間とは何か」という問題へと収斂させてゆく批判的な反省によって裏打ちされていなければならない。学際的・総合的な人間科学の建設という理念が、たんなる空語に終わらないためには、このような批判的な反省によって導かれた謙虚な姿勢が必要であろう。」

IV 人間科学のいろいろな意味と可能性

以上に紹介しただけでも、人間科学という言葉はいろいろな意味で用いられている

ことが了解されるだろう。ルーズな意味からタイトな意味へ、順にならべると次のようになるのではなかろうか。

①人間科学部ないし人間科学科という名称で制度的に編成されている諸科学諸学の総称としての「人間科学」。学部学科名称としての人間科学のもとにどのような分野が組み込まれているかは、種々の事情に左右され、まったく便宜的である。

②人間活動や人間行為が媒介産出する領域を対象とする経験諸科学の総称としての「人間科学」，「人格としての人間」を扱う諸科学の総称としての「人間科学」（シュトラッサー）。この人間科学定義は，自然科学の対象としての人間（生物としての人間など）の側面を，対象から除外する。その理由は，対象が人間の意識や行為により媒介されているか否かで，法則理解，認識の妥当性の根拠づけ，客観的認識の方法などが根本的に異なるからである。

③人間諸科学の諸認識を，快適，健康，安全などの面で実生活に応用しようとする応用人間科学としての「人間科学」。アメリカや日本の学部学科名称としての人間科学は多くの場合，事実上はこれに当たると思われる。

④人間の生活を中心関心とする知のネットワーク，諸科学のフェデレーションとしての「人間科学」（塩原勉）。この人間科学理解の本音は，おそらく，一階部分の心理学や社会学や教育学といった伝統的分野の専門性を堅持するという前提で，二階部分に研究ネットワークとしての人間科学を位置づけるという二階建て組織論であろう。

⑤諸科学による人間を対象とする総合研究または総合記述としての「人間科学」（水島恵一）。これは，対象としては＜総体としての人間＞を立てて，個別科学によってではなく，分野横断的学際的研究や叙述で，これを遂行しようとするものである。人間科学は，分野横断的学際的にしか成立しないことになる。

⑥人間を生物的側面と社会文化的側面から総合的に捉える総合人類学の意味での「人間科学」。これは先述の通り，イギリスのオックスフォード大学の人間科学コースやダーハム大学の人間科学課程などに見られる。

⑦人間活動の歴史的エピステーメ的諸条件を分析し了解する研究としての，新しい人間科学（R. スミス）。これは人間諸科学の「歴史的転回」に基づいており，心理学や社会学など19世紀以降に成立した「人間諸科学」を，それを成立させた「歴史的エピステーメ的諸条件」から反省し批判する，人間科学批判の人間科学である。あるいはメタ人間科学の人間科学であるとも言えるだろう。

⑧生命科学による統一的基礎科学としての「人間科学」（竹内哲郎，養老猛司）。生命科学は19世紀以来，現在に至るまで，革命過程にあって，きわめてダイナミックに動いている。その結果，人間科学を人間生物学として展開し，それが総体としての人間

を捉えるための基礎科学であることを自負する挑戦が出てくるのも当然である。ただし、統一科学としての人間科学は、あくまで理念にとどまることを確認し忘れると、粗雑な生物学主義になる。

⑨人間の意識・活動・関係の認識への、自然科学的認識モデルの拡張としての「人間科学」。これはサン＝シモンから行動主義、新行動主義へと流れる線である。人間生物学を人間科学と見る立場は基本的には自然科学の枠内にあるのに対して、この立場は、人間領域へと＜拡張＞したり、人間領域を自然へと＜還元＞したりする。ロジャー・スミスによれば、もともと、アングロ・サクソン系では science は natural science の「短縮形」として用いられる場合が多いらしい（後掲資料参照）ので、こういう意味で人間科学を受け止めるケースは結構多いように思われる。

⑩人間の本性（自然）に関する学としての「人間の学」（ヒューム）。これは諸科学の基礎学として機能することが自負されているのであるが、「人間の本性」についての18世紀的信念に基づいていて、現在では単純には受け容れがたい。

では、我々はこの内どれを選ぶべきか。筆者は人間科学についての若干の個人的な暫定構想をもっており、また自分の所属する人間科学部の望ましい方向性について一定の見解をもっているが、この論文はあくまで、概念史整理とデータ整理をおこなって、議論の素材として提供することにあるので、それらについては機会を改めることにしたい。ここでは、以上に紹介した動向からうかがえる人間科学の可能性の若干を指摘するにとどめたい。

学部学科としての人間科学という名称から共通に伺える第一の点は、何と云っても human beings に関する学際的（inter-disciplinary）、分野横断的（cross-disciplinary）な総合への志向、human well-being へ向けての実践への志向、それにフィールド（現場）への志向であろう。これらは既存の諸科学に対する人間科学の挑戦的姿勢を端的に表すものであろう。しかし人間を対象とする知の総合への志向を前面にかかげて人間科学という名称を押し出している大学は、いわゆる「エリート大学」あるいは大学院に限定されていて比較的少なく、多くは応用人間科学的な、したがって日常的産業的实践への展開をきわめて多様な分野でめざすものであることが明らかになったように思われる。これは高等教育に対する社会的ニーズ、それへの提供側の対応によって単純に説明されるのだろう。ただしこのニーズの中には市民的、世界市民的实践への応用面も含まれていることを見ておく必要がある。

国民国家中央政府や市場や経営組織や近代家族という従来の基本組織を、基本枠として受け容れる見地はまだ強いにせよ、これらを素朴に絶対視する観点はさすがに後景に退きつつある。しかし私の考えでは、マクロ（人類史的レベル）へと超えて

考える方向とミクロ（日常生活者の地平）へと超えて考える方向とが分岐することは、直接には避けがたいにせよ、時代はまさに両方向での反省を結びつけることを求めていると思われ、それに答えることこそ今日の人間科学の課題であり可能性でもあると思われる。国家や市場や企業への志向の過度の集中を脱皮し、日常生活世界や人格史にも焦点を与えるというだけで、果たして今日の人間科学の可能性は語りうるのか。いわば国民国家や市場や会社や近代家族中心の近代世界、近代的人間をマクロへと超える人類史的人間と、ミクロへと超える人格史的人間とが、肯定否定の双面をもって、同時的に対象としてクローズアップされつつあるのではないか。単なるミクロへの道だけでは、今日の日常世界自身が見えないし、単なる旧体制への補完機能を果たしうるにすぎない。例えばストレス病や子供社会の崩壊や過剰消費や情報化などの問題も、日常レベルと人類史レベルを同時に考えることによってしか回答がだせないだろう。そういう意味で言えば人間科学における人類史的ウイングを強めること、また生活者としての日常的産業的実践と市民としての人類史的实践を総合することが迫られているように思われる。転機にたつ人類を前にして、マクロな人類史レベルとミクロのパーソナリティー・レベルを結ぶという課題に、人間科学は向かい合っているのではなかろうか。

もう一つ、人間主義と理論的反人間主義をめぐる問題がある。かつて構造主義や構造主義的マルクス主義は、理論的ヒューマニズムを激しく批判した。構造認識をさげ、自由意志を過大に見積もり、「人間的」という言葉であるべき姿、望ましい姿を素朴に語り、「非人間」「不正常」というレッテルで自己および他者を抑圧して権力システムを正当化・合理化すると。俗受けを狙うという意味での「人間科学」には、この種の批判が今日も有効だろう。しかし我々は資本主義世界経済、国民国家、近代家族などの諸構造を超えて人類、人格、日常生活者などを扱うのは、そこが構造なき自由の理想郷だという意味ではまったくない。従来、近代主義や国家主義や会社主義に災いされて視野に入らなかった構造の諸レベルにまで視野を拡大するという意味である。その限りでは構造主義的人間科学批判は単純には当たらない。そればかりか、ロジャー・スミスのように人間科学の「歴史的転回」を通して、人間科学自身を人間の営みとして自己回帰的に批判するような、人間科学の有力な新方向も出てきているのである。筆者自身は、この方向に全面的に同意するわけではないが、大いに傾聴に値するものと考え、以下に資料を付すことにした。

V 資料 ロジャー・スミス「人間科学——その歴史、その社会学」

（以下に、参考資料として、Roger Smith, Human Sciences: History and Sociology, in

THE INTERNATIONAL ENCYCLOPEDIA OF THE SOCIAL & BEHAVIORAL SCIENCES, 2001. を訳出しておく。ロジャー・スミスは人間科学の歴史に関する大冊『人間科学の歴史』1997, ノートン社科学史叢書, の著者であり, ランカスター大学で科学史を教え, 現代の人間科学史研究の中心人物の一人と目される。)

「人間科学」という言葉で指示するものは, 固定的でなく, 一定していない。若干の例外を除いて, このタームと現存する学科の間に対応関係はない。実際, このタームは学者が異なるのに応じて異なる内包をもっている。ある人たちにとっては, 人間科学は, 知識の特殊な実質によってでなく, 人間たちに関するどんな種類の体系的な知識が可能であるかに関する討論によって構成される分野を指す。対照的に, 他の人たちは「人間科学」という分野は単純に人間の生物学のことであると考えている。もっとも普通に見られるのは, このタームが便宜上のもので, 「人間科学」は人間活動に関する知識の過去と現在の追求を, 詳細に何が含まれるか特定せずに, カバーするとするものである。このタームは心理学, 言語学, 社会学, 人類学, 経済学, 人文地理学, 政治科学をカバーする場合もあるし, また生命諸科学の諸部分, その歴史, 生命医学, 認知科学, 脳科学や他の領域を含む場合もある。にもかかわらず, この人間科学というタームが, 現存諸学科の知識や達成や限界をめぐる一群の討論を意味することが, ますます普通になり, また重要になってきている。

1 意味と語法の対比

精密な定義を与える上での困難は主題からくる。「人」は経験的に境界づけられた主題ではない。中心問題は所与の領域における経験的な調査研究というより, どのように主題を特徴づけるかをめぐる理論的な議論である。同時に, 進化生物学とかカルチュラル・スタディーズというように相互に分化している研究活動諸領域からの経験的研究がかなりの影響を及ぼしている。研究分野の内容は, 生物学の人間種であるとか, 「人」の「存在」であるとか, 言語それ自体とか, 社会的歴史的に構築された文化とか, 人間生活を秩序づける諸実践とかを包摂するために様々に言われる。

人間科学というタームが, 限定しないやり方で, 人間に関する知識を指示する場合は, 語法は sciences de l'homme に, つまり心理諸科学や社会諸科学をカバーするフランス語系の大学生活の伝統的な区分を表すフレーズに関係する。また人間科学と「Geisteswissenschaften」, つまり人間の心や精神の活動性に関する sciences の間に重なりもある。ドイツ語の語法が示すように science という言葉自身のもつ色々な意

味が人間科学をめぐる議論を呼び起こす。大陸部ヨーロッパでは知識の専門化した合理的な実質が science を形成する。(たとえば神学は一つの人間科学として指示される。) 一方、英語圏では science は「自然科学」の短縮形として使われることが多い。若干の自然科学者の語法を除いて、human sciences への言及は大陸部ヨーロッパの語法に従い、潜勢的「science」としての人文学(humanities)諸分野を含んでいる。歴史的に見ると「human sciences」は18世紀と19世紀の「science of man」と「the moral sciences」にルーツをもつ。これらの英語の表現は人間の理性、言語、道徳性、そして社会によって区分されると考えられた知識の諸分野を指示している。

社会諸科学においては、自然諸科学に包摂されず、人間の活動やその産物の理解という目標を共有する諸学科を「人間諸科学」に含めることが普通になりつつある。制度的にはこれらの諸学科はしばしば社会科学部を形成するが、自然科学部へと(たとえば心理学)、あるいは人文学部(たとえば歴史学)へと広がる場合もある。一方、集合タームとしての「人間科学」への言及は便宜問題を越えている。深刻で複雑な事柄が賭けられている。一方の見方は、人間主体に関する知識または「science」の、本性についての討論は、人間であることに内在しているものであり、それゆえ「human science」は本質的に論争の余地のある領域である、と主張する。human sciencesのすべてのアスペクトの、同一性、内容、諸方法に関する同意の不在の長い歴史は、この見方を支持している。この同意の不在は20世紀末にも、とりわけ自然諸科学や人文諸学それぞれの貢献をめぐる論争において続いている。

しかし時には学者たちは、一つの特殊な科学が統一人間科学(unified human science)の基礎づけを提供すると主張したことがある。1800年頃にフランスの知識人たちは「イデオロジ」、つまり感覚と身体組織における行為と観念の起源に関する一科学を宣揚した。合衆国では1950年代に「行動科学」を統一人間科学とする試みがなされた。さらに近年では、若干の科学者は進化生物学を人間存在の基礎科学として奨励している。

2 語法の評価可能な内包

社会諸科学のむかしの事典には人間科学への言及はない。最近の用いられ方は、アカデミー社会での、変化しつつある議論と価値を反映している。第1に、学者の多くは異なるアプローチ間の相互作用を歓迎しており、不同意は科学の失敗だとは考えていない。むしろ若干の学者によれば、本来不同意は人間たちの知識に内在するものである。第2に、彼らは自然科学が、人間領域の多くについて説明を提供せず、またで

きないと論じる。このような論点が生じる理由は、自然科学が未発達だと考えられているところからでなく、自然科学の知識がある種のトピックス（たとえば象徴化とか意味）を扱わないというところからくる。

第3に、多くの学者は心理、社会諸科学と人文諸学（つまり美術史や文学理論のような学科など）の間の新たな諸関係を確立したいと望んでいる。第4に、人間科学への関心はしばしば、人間諸実在とそれらの表象についての信念の歴史が、知識には必要であるという見方への共感である。最後に人間科学という語の用いられ方は、現存の社会諸科学や人文諸学科が、偶発的で可能的に限定的な仕方では知識を構築しているにすぎない歴史的社会的構成物だ、という確信を表現している。より深い知識は「人間科学」への言及によって暗示されるような、架橋する概念を必要とするのである。

したがって人間科学というタームの広がりとは、社会諸科学の実証主義的見方の批判や統一する概念としての「行動」への批判と相関しており、また歴史と科学的知識との関係を再考することへの関心、心理諸科学や社会諸科学における学科的特殊分化を克服することへの関心とも相関している。若干の観察者は、これらの価値評価とポストモダンのエトスの照応を見ている。完結しない議論、知識の統一化への懐疑、学問文化の他の諸領域で発達した理論や方法を用いて「科学」の吟味へと転回すること、これらへの歓迎は、「人間科学」というカテゴリーへの関心の広がりだが、一層広い変化の一部であることを示唆している。

それでも、「人間科学」というタームは、人間領域を包括するよう自然諸科学を拡張するということを述べるにすぎない、と考える若干の科学者もいる。この語法はほとんどの学者により拒否されてはいるが。ほとんどの学者は人間たちは自然の一部である（従って自然諸科学のサブジェクトである）ことを否定しない。しかし彼らは、人間活動が反省や言語の歴史的プロセスを通して自己創出されたものである（従って客観的知識の非自然科学的諸形態が存在する）と考える。統一人間科学（unified human science）の創出という主張を持たない学者たちの間でも、強調点に大きな違いがある。哲学者の Charles Taylor のような若干の人は、「humanist」と呼びうるかもしれない。彼らは人間活動に内在すると考えられた諸価値を理由に、人間科学の示差的特質を論じた。この方向は「言語論的転回」、つまり知識のサブジェクト・マターとしての言語や表象（「自然」「存在」「人間」というより）に関する一連の論議の中で批判的に解体された。Michel Foucault のような学者は、彼等の企てが「本質的に人間的な」なにかへの言及を拒み、特定の時間における知識の可能性の諸条件のみを考えるので、「反人間主義」と呼びうる。けれども他方、Ian Hacking のような科学哲学者は、一方で人間というサブジェクトに関する新たな見方を拓きつつ、緊張状態

でこの人間主義と反人間主義の両極性を保持し続けるさまざまな道を見いだしているのである。

3 人間諸科学の歴史

心理学や社会諸科学という近代の諸学科は、その大部分が19世紀末や20世紀初頭に創造されたものである。それらの確立は近代化過程の一部であり、人間活動を合理的な学科へ従属するものとして再創造することの一部である。このことは少なくともヨーロッパにおける近代初期から明瞭である。歴史家が「啓蒙」と呼ぶ期間中、自然法則に関する知識を、個人の活動や社会の活動を包摂するために拡張しようとする、深く影響を与える試みがあった。学者たちは、アカデミーの外部でも内部でも、さまざまな舞台上、多くの知的アジェンダに従って活躍した。Giambattista Vico はナポリ大学の修辞学の教授であったが、彼の「新科学」は、人間の創造物としての神話、詩学、歴史を含むものであった。David Hume はエッセイストとして『人性論 [人間の自然について]』を書いたが、彼の友人の Adam Smith はグラスゴー大学のモラル哲学課程で「諸国民の富」について教えた。Montesquieu はフランスの貴族であったが、法システム、政府、習俗に関する彼の比較研究は、社会的生活の相対性という観念の価値を高めた。他方、ザクセン-ワイマールの文官であった G. Herder は人民の運命と文化や言語の運命を結びつけたのである。

しかしまだ「the human sciences」への言及はなく、むしろ「the science of man」が見られるのみである。歴史家たちは、すべての知的活動のための背後条件を包摂するために、the human sciences というタームを用いる。知的活動が近代の諸学科へと分割されたのは19世紀末以降なのである。たとえば社会科学哲学者 P.T. Manicas は、政治経済学が最初の「科学的」な人間科学であったと主張した。「人間科学」史家たちは、知識や実践の分類が歴史的に相対的なものであることを強調することによって、心理学史家や経済学史家や他の学科の歴史家と、自分を区別しているのである。

19世紀には、G.W.F. Hegel, Auguste Comte, Karl Marx, Herbert Spencer, それに Charles Darwin が、それぞれ統一された「science」の視野の内部へ人間の存在を運び込んだ。それぞれが、歴史的説明形態を通して人間存在を理解可能にしようと企てた。彼等の仕事の全くの一般性と視野は、しかし、社会諸科学における学科編成を伴う主要な諸修正の原因ともなった。思弁的な歴史的再構成は、詳細で経験的な知識のための専門的研究を統合する点において、また社会問題の文脈において生じた知識を統合する点において、貧弱であった。

結果は、専門家とアマチュアを差異化することへと、研究や訓練を大学の内部で専門学科として制度化することへと、科学であると思なされるものを応用から分離することへと、傾倒することであった。知識の基礎づけについての、また自然に関する知識と文化に関する知識の関係についての討論があった。J. S. Mill は、「the moral sciences」という見出しの下で、[自然知と文化知の] 説明的連続性を支持するケースを述べたものの、人間的自然の諸法則による社会生活の説明の前には、巨大かつ複雑な課題が横たわっていると考えた。独仏語系の諸大学では、人間諸行為の解釈学的、あるいは解釈的な了解の必要に関する討論があった。この討論は20世紀の終わりにもまだ引き合いにだされている。つまり法則定立的 nomothetic（または法則風 law-like の）説明と、個性記述的 idiographic な（または特殊な）説明の区別とか、構造的説明と歴史的説明の区別（とりわけ経済学や言語学で）とか、諸価値が科学にどう関係するかなどについてである。Wilhelm Dilthey や Gustav Schumoller や Emile Durkheim や Ferdinand de Saussure や Max Weber など、この討論に参加した学者は、人間科学に対して彼等の第一義的な参照点の多くを与えた。

英語圏、とりわけ合衆国では、結果は経験的に基礎づけられた諸学科の設立にあったのだが、これら諸学科には、しばしば自然科学の範例にしたがっているのだという信念が伴った。1945年以降、専門研究のこの合衆国モデルは、ほとんどの国でも支配的になった。多くの研究者にとっては、このモデルは、客観的知識の基盤の上で人間生活の改善を行うという啓蒙のビジョンを前進させるものであった。しかし、一層統一的な、そして一層効果的な社会科学への希望があった場合にのみ、「人間の科学 the science of man」に比較できるようなグローバルなプロジェクトの討論が存在したのである。戦間期にロックフェラー財団は「パーソナリティーと社会・の科学」を援助した。1952年のフォード財団の社会科学への参入は「行動科学 the behavioral sciences」を育成した。社会科学の統一へのコミットは、知覚された「モラル・ラグ」による国民政治の水準では、人間の諸問題を秩序立てるためには、自然科学とテクノロジーの方が政治的モラル的能力より勝っているという信念にマッチしていた。

「the human sciences」への言及は主として1980年代から始まる。社会科学に関するマルクス主義哲学と経験主義哲学双方の弱さが、理論の、歴史的でもあり哲学的でもある再審へと導いた。人文諸学や社会諸科学における発展は、客観的真理や物質的実在性に関する問題に向かう——経験主義的主要潮流において慣習的なことであるが——というより、知識と権力の「表象 (representation)」の経験的研究へと向かわせた。対照的に、若干の生命科学者は、彼等の分野こそが人間を理解する上で唯一適任であると、競って主張した。このようにして異なる利害を持った異なるグループが、

「人間科学」という同じ一般タームを推進することを有用と考えた。普及した英語のタームは「the human sciences」のみだった。それは、英語圏では「the science of man」より、ジェンダーとの関連で中立的に見えるからである。

社会的環境は新しい大規模な制度的再編に有利でなかった。自分が主に人間科学を専攻していると確認する学者の数は、現存諸学科のひとつを専攻するのに反対する学者と同様、少数でありつづけている。にもかかわらずとりわけ歴史を強調しながら、次のような若干の組織が出現した。つまり研究誌『History of Human Sciences』（1988年創刊）、「ヨーロッパ人間科史学会（the European Society for the History of the Human Sciences）」、「フランス人間科学史学会（the Société Française pour l'Histoire des Sciences de l'Homme）」、「北米科学史学会人間科学史フォーラム（A Forum for the History of the Human Sciences within the History of Science Society in North America）」である。諸研究所や諸会議が「the human sciences」というタームを用いる場合、人類学、応用社会科学、社会心理学のような諸学科を、共通の行政上の傘のもとに、時々共通の研究上の傘の下におくといった形で、地域的組織的ニーズに対する功利主義的対応となる傾向が見られる。

4 理論的内容

もし我々が、人間科学の内容は開放的（open-ended）である、という見方を取れば、この分野は次のような性格を持つだろう。まず何よりも、この分野は人間主体が何で「ある」かについて前提せず、何らかの特殊な時間と場所における人間活動の歴史的エピステーメ的諸条件を分析し理解しようとする。したがって、人間行為と人間的自然の表象——実践においてある、あるいは書かれた資料やビジュアルな資料やほかの資料においてある表象——に関する、そしてまた「経済学」や「近代性」や「自己」といった基本的カテゴリーに関する、ひとつの文献が存在するのだ。人間科学と言う分野は、このようなやり方で理解される場合、客観的知識の主体として、進化的生物学を、あるいは日常言語で言えば「人間的な自然」を、前提せず、むしろ客観的知識として受容されているものが、どのようにして歴史的ないし人間的に構成されたプロセスを通して創出されるか、を理解しようとする。人文諸学科は、象徴的表象、修辞学、アイデンティティー形成——個人のものであれジェンダーのものであれ、エスニシティーのものであれ、文化のものであれ——というようなトピックスへの関心を勇気づけることによって、著しい影響力をもつ。

この分野は「社会諸科学の歴史と哲学」と重なる。しかし昔の英語圏の哲学が社会

科学の経験論的アジェンダを当然と見る傾向があり、たとえば法則風の説明、實在論、理性と当体といったものの本性を吟味したのに対して、この新しい分野はそういうことをしない。それは、第一現場におけるアジェンダの構成に、より多く関与するのであり、それゆえ知識に対する専門性の影響、権力と表象、「社会」とか「情緒」とかの基本概念の「所与の」性質といったトピックスを吟味する。抽象的な理論化よりも、特殊なものの経験的な諸研究が、しばしば分析の形態を示唆するのである。

最近の科学史や科学社会学（つまり自然科学史や自然科学社会学）は、心理社会諸科学に特有の諸問題を、大部分、独自に展開した。だがもちろん、科学的知識の社会学やテクノロジー社会学は、それ自身が社会科学への大きな貢献であり、社会科学の歴史の一部である。Kurt Danzigerのような学者たちは、知識の社会学を心理諸科学や社会諸科学に拡張した。しかし、さらに一般的なのは、歴史家たちが、社会諸科学における活動を、時と場所の特殊な諸ファクターのタームで説明するために、つまり文脈的な説明を提供するために、新しい科学社会学を非公式に採用したということである。

人間諸科学における多くの研究は、「反省性（自己回帰性）」や「言語論的転回」をめぐる緊張の増大のように、知的文化の中での全般的シフトを表現している。「反省性」というタームは多様な用法をもつが、もっとも一般的な意味でそれは反省する活動、つまり現存事態の表象（representation）を作るという意味と、プロセスを通して現存事態を再創造するという意味の、二重の意味での「反省作用（reflecting）」の活動を示している。そのもっとも明瞭な例は言語である。言語は、人間活動の中にある世界を、再現もし、構成もする。言語の「彼方の」世界や社会や人間的な自然へと到達することの不可能性に関する議論は、人間諸科学の内容としての言語（また言語を形成すると考えられた他の記号）に焦点を当てた研究を、活気づけた。これが「言語論的転回」である。このような主張やシフトが含むものが、激しい、そしてしばしば隠然たる論争の主題となった。しかしその含意は、かかる論争のまわりに建築された分野が、その視界や展望において開放的（open-ended）であるということである。

影響ある議論が Foucault からやってきた。Foucault はある段階で、人間諸科学は近代の「エピステーメ」、または真理の諸条件を確立するフレームワーク、の一部であると主張した。このフレームワークは、彼の考えによれば、1800年頃に、とりわけ教育制度や感化院制度において、主体として人間を反省することを創出する諸実践を通して、存在するに到った。彼は反省性（reflexivity）を近代という時代の特殊な条件として描き、これを、知識が、昔の「古典」時代において、言語や分類や政治経済学を通して、可能となったやり方と対比した。多くの学者がフーコーの絶望的な言

明の諸特質に反論したものの、知識の諸条件に関する彼の全般的暴露は有意義であり続けている。学科と政府の実践的配置の中に人間科学の源泉を求める彼の研究、権力として知識を見る彼の調査、そして社会諸科学と人文諸学を架橋する論述の利用は、近代の研究の顕著な特徴でもある。

このようにして、人間諸科学は、社会諸科学や人文諸学科や諸論題の、不安定で変動する群れとして存在している。それは、時には単に便宜のために群れをなしているにすぎないが、しかしまた、分有されている、知識と価値に関する諸問題が賭けられているがゆえに、群れをなしてもいるのだ。人間諸科学というこのタームの用法が今後どう展開するかは明瞭でない。しかし未来は、「歴史的転回 (historical turn)」が人間活動の表象 (representation) の源泉と内実に関する歴史的知識を拡張し再考した仕方について、考慮するだろう。それは「言語論的転回」の含意や人間活動としての表象それ自体の含意をとおして働き続けるだろう。

人間諸科学は、つまるところ、正統とされている知識の近代システムが諸大学において確立されて以来の1世紀半の間、諸学科の構成に関する、それどころか科学というものの構成に関する批判的反省を意味するのである。21世紀のはじめに、過去の権利請求が疑問視されないままであるとすれば、驚くべきことであろう。フェミニスト的展望やポスト・コロニアルな展望のような新しい社会諸勢力は、かなりのインパクトをもっている。この人間科学分野がどのように構成されるかに関する異なる見方は、人間諸科学は生物学の一分枝であるという極端な意見から、生物学をまったく無視する反対の極論まで、いろいろ見られる。社会諸科学の内部では、知識に対する統一的で因果的説明的な枠組みは訴える力を減少させている。むしろ人間諸科学という項目名のもとで働く学者たちは、20世紀の心理学や社会科学の多くによって当然と見なされてきた諸素材に関する、経験的に研究された評価を提供している。以前の社会科学者たちが、現存する諸カテゴリーや諸概念の基盤で知識を展開することを相対的に問題なきものと考えたとすれば、人間諸科学は問題なしとされる質それ自身を研究の主題とすることにより、新たなパースペクティブをひらくのである。

(この論文は、大阪経済大学人間科学研究会第2回研究会(2002年6月28日)、第10回研究会(2003年7月4日)、および「人間科学の基礎」担当者合宿(2002年12月26日)での報告にもとづいており、2003年度共同研究「人間諸科学の21世紀的再編と大阪経済大学人間科学部のアイデンティティー」の成果の一つとしてまとめられた。)